

Title	模擬論理委員会という試み
Author(s)	稲葉, 一人
Citation	臨床哲学のメチエ. 2002, 10, p. 34-36
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/11873">https://hdl.handle.net/11094/11873</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

報告

# 倫理委員会に何ができるのか？

第10回日本ホスピス・在宅ケア研究会九州大会報告

「倫理委員会」というものをご存知だろうか？一度くらいは耳にしても、実際そこで何が行われるのか多くの方はよく分からないに違いない。その意味で今回行われた「模擬倫理委員会」は、これまでほとんど内実の知れなかった倫理委員会の方法と内容を、そして限界さえをも問いかけるほとんど例のない画期的試みである。詳細は以下参加メンバー3名の報告をお読み頂き、ご意見・ご批判を賜りたい。各々の報告内容を簡単に紹介しておこう。最初に企画の発案者である稲葉さんが、倫理委員会の現状とそれを踏まえた今回の企画概要・結果報告をしている。次に当研究室の渡邊さんが、事例詳細と倫理委員会での看護職の役割・葛藤を踏まえて、倫理委員会の今後の在り方に対する提言を行っている。そして最後に当研究室の菊井さんが、患者とその家族の置かれる複雑且つ困難な状況を記し、その立場からみえてくる倫理委員会の限界を指摘している。今回取り上げられた事例は、実は臨床哲学で昨年(2001)一年間通して議論した「食べることとケア」の中で議論された事例でもあった。この事例そのものは取り上げられていないが、一連の議論の成果を『臨床哲学第4号』で特集しているので合わせてお読み頂ければ幸いである。(加えてフロアディスカッションでも積極的にご発言頂いた白浜雅史さんのホームページに今回の事例詳細・検討、並びに模擬倫理委員会に対するコメントが掲載されており、フロアにはどのように映っていたのか、そして問題点は何なのかを知る上で貴重である。この場を借りてお礼申し上げますとともに、読者にもぜひ1度ご覧頂きたい。)

(桑原英之)

## 模擬倫理委員会という試み

稲葉一人

中岡成文(阪大教授)さん、西川勝(阪大院)さんと一緒に、日本ホスピス・在宅ケア研究会第10回九州大会のバイオエシックス部会の企画として、「終末期の食の問題をめぐって」模擬倫理委員会を行いましたので、その試みの、経過・意図と、課題について、報告したいと思います。

私たちが立てたプロトコールは、次のようなものです。「ここは、ある病院内に設置された倫理委員会です。委員は、医

療者(医師、看護師)でだけではなく、倫理学者、法律家、一般人で構成されています。病院臨床で起こる様々な倫理的問題を含むケースについて、コンサルテーション(相談業務)も行う趣旨で設置されました。今日は、終末期を迎えられた患者さんが、既に意思表示ができない状態で、「食べる」「食べない」について、医療者とご家族の間で意見の食い違いがあるという事案について、倫理委員会に相談が持ち込まれました。倫理委員会は、臨床の医療者だけではなく、家族の出席も求め、質疑・話し合いが行なわれます。委員役だけではなく、会場に参加の方も踏まえ、新しい倫理委員会の実践を模索

します」という前提で行いました。その狙いは、病院内倫理委員会の役割、とくに臨床上の問題についてのコンサルテーションについて考える、倫理委員会での、医療専門職以外の役割や、その役割を生かすための工夫について考える、臨床の医療職だけではなく、患者・家族の参加を求めての、新しい倫理委員会の形を考える、倫理委員会についての新しい役割を考えるというものでした。

冒頭に私の説明に始まり、中岡倫理委員会委員長、私が法律家役(元裁判官)とし、渡邊美千代(阪大院、看護職役)さん、杉謙一(医師)さんと、一般市民役として看護職のかたが、委員会を構成し、臨床から、中尾(医師)さん、患者の息子の嫁役として、菊井和子(阪大院、看護教員)さんと、患者の孫役として、西川さんが、出席するという布陣で始めました。

私が、この企画を立てたのは、個人的には、大きくは次の二つにありました。一つは、前記の狙いにもありますように、これまで、倫理委員会といえば、IRB (Institutional Review Board)であり、(先端)研究の倫理が重視されることが多かったのですが、米国ではHEC(Hospital Ethics Committee)が多く存在します。また、日本の臨床の現場でも、臨床上の様々な倫理的問題についてのコンサルテーションのニーズが75.7%と高い(赤林朗「日本における倫理委員会の機能と責任性に関する研究」平成9から11年度科学研究費補助金基盤研究)というのに、この要望を十分に受け止めるシステムがないのです。模擬(病院内)倫理委員会の試みは、これに対する一つの返答になるのではないかと考えたので

す。もう一つは、本年2月に、21世紀日本の重要諸課題の総合的把握を目指す社会哲学的研究(科学研究費補助金(基盤B1)の研究会で、「(医系)倫理委員会の現状と課題 非医療者委員の役割について」報告をしたことにあります。特に、倫理委員会は多様な構成を持つように求められながら、医療者委員以外の委員の役割が十分に生かされているのか、そのためにはどのような仕組みが必要で、どのように専門家とそれ以外の人が(臨床)コミュニケーションができるのか、問われると考えたのです。

模擬倫理委員会は、約100名にも及ぶ傍聴者に囲まれながら行なわれました。議論は、どうしても、医療的な側面に引きずられ、私に関していえば、法律家が、「侵襲」への同意をチェックするという、ネガティブな関わりに止まってしまった感があります。会場からも、医療的な面に即しても十分な検討がなされていない、倫理委員会は本当に真剣に検討しているのか十分伝わらないという、厳しい意見も頂きました。考えれば、臨床上の問題は、単に医療を選択するというものではなく、それぞれ、生身の生活と歴史を背負った、生きた人の課題であり、中途半端に伴走する、約1時間の倫理委員会で、判断の道筋を示すこと自体無理であったともいえます。また、事案自身が、事前の意思表示がないまま、意思を示せない患者の気持ちをどのようにして考えていくのかという難しい問題なのです。しかし、私は、その後の様々な肯定的なご意見を踏まえ、次のような成果があったと思います。

まず、初めての試みであったことにあ

ります。何事も「始め」がなければ始まりません。これまで、病院内倫理委員会の必要性が叫ばれても、海外の文献(例えば、リサ・ベルキン「いつ死なせるか」ハーマン病院倫理委員会の6ヶ月間)が多少あるだけで、日本の臨床上のコンサルテーションを行う倫理委員会の実態等は明らかでなかったのです。これは一つの大きな試みになったと思います。また、臨床的な問題について、複数の立場の異なる第三者がコンサルテーションすること、また、立場の違う者が意見を交わすことの難しさも明らかにしました。患者・家族は、第三者が様々な意見を繰り広げるのを見て、どう感じたのでしょうか。

医師によれば、臨床上は、このような事案は日常茶飯事だということのようです。では、これを、患者・家族・医療者は通常は、どのように解決しているのでしょうか。そのやり方には問題はないのでしょうか。では、倫理委員会は、その問いに結論を示すことができるのでしょうか。もっと違う、伴走するシステムが必要なのではないのでしょうか。こんな素朴な問いを残したことを宝として、また、バージョンアップして、試みは続けていきたいと思います。(いなばかずと)

模擬倫理委員会に家族役で参加して  
菊井和子

看護師役が都合で出席できなくなったのでエキストラとして参加するようにと西川さんから声をかけられたのが開催日の数日前だった。私は看護師役より68歳の長男の妻(未亡人)の方が適役ではな

いかと強引に家族を演じさせていただいた。院内倫理委員会(HEC)については日頃から関心があったので、第一回模擬倫理委員会に参加できたことは幸運だったと感謝している。

そのような訳で今回の模擬倫理委員会には飛び入りで参加したので企画者の意図を十分に汲み取れていなかったのではないかと危惧しているが、その分、医療現場の現状を自由に演じられ、結果的には良かったのではないかと甘い自己評価をしている。私としては自分が看護の専門職という立場は括弧に入れて、これまでに出会った家族や自分自身の体験をもとに家族役に徹したつもりである。舅姑の老後の世話は長男の妻の当然の勤めとする伝統的家族制度のしきたりと最近の自由で自己中心的な若者文化との狭間で揺れる68歳の嫁は重要な役だと言われて緊張した。そこで西川さんに孫役をお願いしたところ、孫が非常に雄弁に理屈を申し立てるので何も言えずただ従うしかない振りをした。後でフロアから嫁はもっと自己主張すべきというコメントがあったが、委員会という堅苦しい不慣れた場所ではとても自分の意見なぞ言えず、本音と建前を使い分けるのが昔気質の嫁というものである。委員会ではいかにも弱気で従順な旧制度の嫁を演じ、その不満を後で息子にぶつけるという台本にない家族のみの場面を司会者をお願いして作ってもらったところ、これがうけてフロアがどっと湧いたのには驚いた。私としてはごく普通の親子の会話だと思っていたからである。全体としてあまり深く考えず、なるべく自然体で通したので楽しく演じさせてもらったと言え